

インタビュー 二宮宏之氏にきく

とき 1991年11月26日

ところ 二宮氏御仕事場

企画・採録・聞き手 橋場 弦

1. 二宮先生のものまねを……

橋場：学部三年生だった時、先生が（東大に）非常勤でいらっしゃられた時の講義をとっていたんですよ。

二宮：あっ、そうですか。何についての講義でしたかね。

橋場：ポリースの話です。アンタンダンとかいろいろな話を聞きました。あの時は、二宮先生の講義を聞いていた同級生の中で、ひとしきり先生のものまねが流行ったことがありましたけど。

二宮：は一、くせがありますか。

橋場：何だか分らないですけど、そんなことしていたことがありました。あれは先生、何年間くらいなさっていたんですか。

二宮：二年やって、そのあと一年おいてもう一度二年やったんじゃないかな。とにかく二度行ったんですよ。みんなが冷たい目をしてね、冷やかに対応するんで参りましたよ。これでは、ソシアビリテは成り立たんわ、と思っ

橋場：いやー、逆ですよ先生。今日も久しぶりに二宮節が聞ける、って感じで聞きに来たんです。

二宮：最初の二年間は社会史ってんで、歴史人口学あたりから始めて、捨て子の話なんかもやったんですけどね。二度目の時は、ドラマールの『トレテ・ド・ラ・ポリース』に沿いながら、アンシアン・レジームのポリツアイ（ポリース）の問題をやったんですが、橋場さんが聴いて下さったのはこちらでしょう。七面倒臭いテーマでしたから、柴田（三千雄）さんに、「君、ポリースの話なんかやってみんな聞いているか」って言われちゃいましたよ（笑）。しかし、ポリツアイをやるには少々緊張しました。だって、本郷は、成瀬（治）さんがいらして、ポリツアイをもって学派をなすはずであったんで。

橋場：あったんです。ぼくはその時一応成瀬さんの弟子だったんですよ。

二宮：あー、そうですか。まだ古代史じゃなかったんですか。

橋場：最初はドイツ史志望だったんです。途中で古代史に変えたために留年したんです。

二宮：あ、それじゃ、木村（靖二）君と逆だ。

橋場：そうですね。ですから、ポリツアイは、成瀬先生からやれって言われてたんですけど、結局さっぱり分らないで、逃げましたですね。学派をなすはずだったんですが。

二宮：あっ、そうですか(笑)。

橋場：同じ近世史でも、隣の芝生かもしれません、フランス史なんかは華やかに見えてですね。同じ時代、たとえば17世紀のドイツなんか、なんでこんなに暗いのかって。やめたのはそれも一因なんですけども。

二宮：へー、たいしたもんだなあ。下から上へ時代を遡って行くって人は珍しいですよ。上から下へ脱走してくるってのは、これはまあね、三つ四つ言葉をやらなきゃならないところを一つで済まそうと思って脱走してくるわけでしょ。逆は大変でしたね。ぼくはあんまり大きく時代を変えたってことはないですよ。どうしてこんなに付き合いがいいのかと思うことがあるけど……。

橋場：いやー、それですよ、付き合いってことが。どうして私はドイツと仲が悪かったのでしょうか。相性が悪かったんでしょうか。

2. 「まず社会化してしまった」

橋場：ではまず、卒論を書いていた頃（1955年頃）のお話からお伺いしたいのですが。

二宮：そうですね、実は卒論よりも、その前史の方が僕にとっては大きいんですが……。

しかしまあ卒論からいきますとね、テーマってのは一種の近代社会成立史論なんです、そのごく一部をやったわけで。届け出たタイトルは、「16世紀フランスにおける農民層分解の二つの道」とかいう題だったと思います。フランスの16世紀ってのは、領主制の内部に地主小作関係がでてくる時期なんです、その小作の在り方が近代的な地主小作関係か、近代的ではない——その頃は封建的とか半封建的とか呼んでいましたが——地主小作関係か、といった議論の中での仕事だったんです。『歴史学研究』に出した「フランス16世紀の小作経営について」が、卒業論文に近いんです。修士に入ってからほぼ同じテーマを続けたもんですから、その後若干手直しがしてあるんですが、骨格は卒業論文のものです。

そこに行くまでにはいろんなことがありましてね。て言うのは、僕は中学一年の時に戦争が終わったんで、教科書墨塗りの世代なんです、急に世界が変わっちゃったんですよ。ちょうどものを考え始める時期ですから、相当こたえた。ただ、もうちょっと上の世代は、戦中にすでにものを考えていて皇国史観なりなんなりにコミットしてますから、この大転換は他ならぬ自分自身の問題になっていたと思いますが、僕等の場合はそこまではいっていませんからね。今まで教わっていたことが崩れちゃったというだけで、自分自身が崩れるというのはちょっと違ったんですよ。ただ、それまで世界を見る枠組みとして我々に示されてきたものが全部崩れちゃった。学校の先生がみんな坊主になって、軍服着たりしてやっていたのが、急に何も命令できなくなっちゃったわけですからね。それからの五年間くらいが本当の戦後の時期でしょう。戦後の、輝かしいという

か、きらきらした時代だったように思いますけどね。

僕の場合でいいますとね、そこでまず、自分を社会に向かって開いちゃったんですね。何よりもまず社会的存在として自分を意識するようになったんですよ。これは厄介なことですね。普通は、人間ていうものは、自分の内面というものを意識した上で、自分と、自分を取り巻く世界との関係を考えだすものでしょ。たとえばアンドレ・ジッドの場合にしても、まず自我としての個人があって、それが『コンゴ紀行』とか、あるいは『ソビエト紀行』などに見られるように、どういうふうに社会へ自分を開いていくか、その開き方が非常に問題で苦心惨憺するわけですね。ところが僕の場合などは、逆にぱっと社会に開けちゃったんですよ。自分を振り返ってみると、随分厄介なことだったなあと、後から考えますがね。

伊藤書店をご存知ですね、もちろん今では潰れちゃったんですが、左翼の出版社で、戸坂潤の全集を出したり、唯物論とかマルクス主義関係では、質のいいものを出していた本屋さんです。僕が中学の時、その伊藤書店の御曹子が、僕の一級上にいましてね。それで社会科学研究会なんていうものを始めた。これはまあ、お決まりのコースといったものであったんですが、ただ非常に印象深いのは、古在由重さんが伊藤書店の二階で『ドイッチェ・イデオロギー』の輪読会っていいですか、セミナーをやっていたんですね。そこへ中学二年の頃から行ってたんです。

橋場：はあー。

二宮：これは今から考えると夢みたいな時代だったなあ、とと思いますけどね。

橋場：中学二年！

二宮：そんなことがあって、戦争直後の五年間、1950年が朝鮮戦争の始まりですが、その間2・1ストが、マッカーサーの指令で中止させられるというような時期がありますね。その頃に僕は旧制中学から新制の高校へ横滑りしていったんですが、そういう中で、まずもって自分を社会化したのです。歴史学との出会いもそうした経過の中でのことなのですが、最初のショックがいまや懐かしき、大塚久雄『近代欧州経済史序説』なのです。中学の三年か、高校一年辺りで、大塚さんの『序説』に大分入れあげていた時期があります。もうひとつは、丸山（真男）さんの政治学。「超国家主義の論理と心理」が1946年かな。「日本ファシズムの思想と運動」が47年ですからね。戦後の学問がパーッと出てきて、そういうのがモロに中学生にも響いていましたね。これは、今と非常に違う。今、中学では（高校でも）一部を除いては、学問世界の動きとはほとんど繋がらないでしょ。それに時代も変わって、知識人のリーダーシップってものがありませんからね。

こんな具合で、社会化の方から大塚史学へと繋がっていたんですが、その頃僕がフランス語を始めていたということもあって、高橋（幸八郎）さんの仕事へ行きついた。『近代社会成立史論』ですね。高橋さんの文体は、大塚さんとは随分違った文体で、あの二人の資質の違いを良く表わしていると思います。僕は高橋さんの文体にとっても惹かれ

ましてね。これは今でもそうなんです、『近代社会成立史論』は大好きな本でした。

ところが高橋さんの歴史学は、事物の力の歴史学なんですね。もちろんウェーバーは入っているんですが、根本は事物の力の歴史学ですよ。で、事物の力と自分との関係をどういうふうに捉えるかというのが、非常に難しかったです。そういう中で、僕自身は戦後転向と自分について思うような、事物の力の世界からもう一度自分の方へ問題軸を引戻さなければどうしようもないんだっていうことがあって、大学を受ける時は、初めは大塚さん、高橋さんから始まってましたから経済学部へ行って経済史をやりたいと思っていたんですが、戦後転向が起こってから目茶苦茶に文学部に行きたくなかったです。

西洋史に行けると判った時はひどく嬉しかったですね。今から考えると何で西洋史に行けるのがそんなに嬉しいのかわからないんですが……(笑)。

橋場：それは深くうなずいてしまいますね。

二宮：大学に入った時より嬉しかった覚えがありますね。それは、あまり意識していなかったけれども自分の位置付けの問題で、そういう方向性を持ちたかったんでしょね。

橋場：やっぱり自分に戻したい、という場合の自分というのは、先生にとってはフランスが好きということですか。

二宮：いや、フランスが好きということではなくて……。ただ、フランスの文学の中の個という感覚に、めくるめく思いで接していました。

それともう一つは、これは思想のレベルでなんです、渡辺一夫先生のフランス・ユマニズムの問題がありました。先程事物の力と言いましたが、この点で大塚さんと渡辺さんが非常にぶつかるところがあるわけで、宗教改革の時に、カトリックとプロテスタントに分裂する。その中でユマニズムが形成されてくるんですが、ユマニスト達はプロテスタントにならないけれど、「それは人間と何の関係があるか」という問いを発していくことになる。そういう中でミシェル・セルヴェ(セルヴェトウス)がカルヴァンにより火刑に処されてしまう。セルヴェはリベルタンだというわけですね。自由思想家だと。

その時に、大塚さんの言えね、カルヴァンこそがプロテスタンティズムの倫理の担い手であって、そこを経過して初めて近代社会ができるんだ、と言うわけね。それに対してリベルタンというのは商人資本、前期的資本と結びついた人達の発想であって、自由などというのは現世における禁欲という英の近代を生む媒介物を押し流してしまうものだ、という発想ですね。ですから、そこには近代社会が生まれるための事物の力というのがありましてね、どうしてもそこを通らなければならない。カルヴァンがジュネーヴであれだけ独裁的なことをやったのもいわば歴史的必然だ、という受け止め方になる。渡辺さんの場合はそれを拒むわけで、一人一人の人間の自由なり自立なりということに重点が置かれるわけですから、セルヴェのような思想をよしとして、『フランス・ユマニズムの人々』の中でそれを力を込めて説かれた。この対立をどう考えるかが、僕には大きな問題でした。ちょうどスターリンの問題もありましたし。

3. 「これではもう世界は解けない」

二宮：というわけで、随分長い戦後転向史になりましたけれど、ところが西洋史に入ってから、困ったことにもう一度ひっくり返っちゃったんです。もう一度『近代社会成立史論』の高橋史学の方へグーッと逆に戻っていったんですね。その辺の所は整理しにくいんですが、やはり高橋さんという人の魅力は絶大でしたね。

橋場：高橋先生の魅力と言うと……。

二宮：あの事物の力の歴史学を支えている人柄のね、これはもう矛盾そのものなんですが、何とも抗し難い魅力でした(笑)。あの頃フランス史はなかなか面白かったんです。高橋先生がいらして、ちょっと上に井上幸治さんがおられてね、その下に全く違うタイプなんだけど、金沢誠さんがいらしてね、この三人の作り出すフランス史研究の雰囲気というのはとってもいいもんだったんですねえ。ですから、西洋史に入って僕は嬉しい思いでフランス史をやってみましたけどね。

卒業論文では地主制の問題をやりましたが、ちょうどその頃大塚史学のなかで言えば、吉岡昭彦さんの大塚批判があって、地主制論争が起こっていた時期なんです。僕の卒業論文から修士論文あたりはその地主制論争に関わっているんで、それをフランスの場でもって検証しようという、そういう背景のある仕事だったのです。

その辺までは何といっても、歴史学が日本社会の革命のプログラムと結びついていたんですよ。戦後十年間というのはまだ歴史学がそういう現実と直接的な関係にあったような気がしますね。たとえば日本共産党の綱領をどういうふうに戦略的に位置づけるのかというね、そういうことが歴史学の直接の問題として議論されていたわけで、「二つの道」って言うのはまあそれですし、それから一段階革命か二段階革命かとかですね、そういった問題がピンピン歴史研究に響いていた時期ですから。

それから、卒業論文からはちょっと離れますが、あの頃の状況で言いますとね、戦後の歴史学は、歴研の大会で言えば「世界史の基本法則」と「国家権力の諸段階」という二つの大会報告が49年・50年、その次の51年——僕が大学に入った年ですが——その時に大きく変わったわけですね。50年がコミンフォルム批判。そこで民族の問題が急浮上するわけで、歴研大会がその後二年続けて、民族問題をテーマに掲げます。それが第一回の、戦後の民族問題の噴出ですよ。ですから僕が駒場に居るときはもう、歴史を階級の側から捉えようという人間と、民族の側から捉えようという人間がまさにぶつかっちゃったんでね。僕はいま「民族」といったものに関わらないわけでもないから(笑)、異様な感じに取れるかもしれないけど、その時の民族問題には全くのアレルギーでした。ですから共産党との関係で言えば国際派の方に親近感がありましたし。だから、農村下放みたいなの……。

橋場：山村工作隊。

二宮：そう、山村工作隊をつくって村へでかけていくといったあの頃の雰囲気、巻き込まれないで、っていうのは変な言い方ですが、自分がそこへ傾斜しなかったのは今から考えると良かったとっているんですけど。

卒業してから修士論文までっていうのは、一種その、発想がどっち向いても行き詰まっていく過程なのです。55年から60年というのは、輝かしい戦後が創りだしたパラダイムがもはや有効でなくなってくる、それにもかかわらず学問世界でそれを変えて行く方向が見えない、その中で自分の仕事を創っていかなければならないっていうところにぶつかりましたから、あれは相当きつい時期でしたね。卒業論文まではそれなりに高揚していたんですが、大学院時代というのは色々具体的な仕事を進めたとはいうものの、パラダイム的にはきつい、重苦しい時代だった気がします。

・そうした気持ちの行き着いた所が60年の岩波の『西洋経済史講座』なんです。あれは若いところでは遅塚（忠躬）君や僕や、もうちょっと下の世代まで加わってますかね。あの頃になると、「これではもう世界は解けない」という気持ちが強まりながら、しかもなおこれ迄やってきた考え方を総決算しておきたいというね。あれに僕が書いたものは、そういう意味では重苦しい気持ちで書いた、ただ論理的なだけとか、パトスの方向が見えない……。

橋場：私の論文みたいな……(笑)。

二宮：ただ、ロゴス的には整理された論文なんです。領主制と地主制をきれいに分けて、「図に描いてみればこういう形になります」という、そういう意味で見取り図としては便利な恰好になっているんですが、それで一体何が言いたいんだということになりますと、何か世界と自分との関係をそれで突破していこうというような、そういうパトスは、入れようが無い代物だったと思います。

橋場：修士論文はどういう問題を扱ったのですか。

二宮：ほとんど卒論の延長です。それを材料的に拡大して行って、そして地主制論争そのものがちょうど大テーマで、その議論に加わる格好になりましたので、それに対応するような形でもう少し理論的な整理は入れましたけれど、仕組みとしては卒業論文と同じで、僕としては卒業論文の方が遙かに好きですね、あの拙い処女作の方が(笑)。マスター論文は自分でもあまり買わないんです。で、その先へ行くと、僕はドクターの途中で助手になりました……。

橋場：ああ、そうですか……。

二宮：ドクターを一年半くらいやって、助手に横滑りして……

橋場：私は五年目でようやく（助手に）なれてですね、それまでは犬猫のような、泥を吸うような生活をしていました(笑)。いつぞや私、さんまの缶詰も買えないでいたんですが、実家に帰ったらさんまの缶詰を猫にやっているんでね、えらく激怒したことがあります

ましたが(笑)。すみません、つい興奮してしまいました……。

二宮：いや、さんまの話で良かったですね、何とかフードだったら大変だった(笑)。

助手をやっていた時期は感覚としてはとっても長かったようだけど、よく考えてみると案外短いんです。確か二年足らずしかやっていないと思いますね。そのころは助手は一人でね。僕のあと少しして二人体制になり、直居君と西川君がなったんじゃないかな。

いやあ、村川(堅太郎)先生が主任(教授)の時代ですよ。僕は本当に楽しいと同時に、身の引き締まる思いをしました。お茶を入れて持っていったら「二宮さん、急須と茶碗とお湯を持ってきて下さい」といって、全部最初からやり直しをなされた。これには参りましたね。そういうわけで、村川さんと林(健太郎)さんでしょ、それから柴田さん、そして北大から堀米(庸三)さんが移ってこられた。

僕はそう濃密な人間関係は作らないんですが、僕の人間関係において、助手時代というのはひとつの山場だったかも知れません。たいへんですよね、助手をやっていると。

橋場：いやもう。口にできないものが(とタメ息)。

二宮：西洋史の良さっていうのは、今井(登志喜)先生時代からね、金沢(誠)助手とか成瀬助手などが引き継いできた一種の雰囲気があるんですね。リベラリズムといえりベラリズム。それに、仲間意識と言うか……。

橋場：成瀬先生は確かに、昔から西洋史のリベラリズムっていうのをよく仰言っていた気がするんですが、その西洋史のいい雰囲気っていうのは、先生から表現なさいますとどうということになりますかね。我々が感じているのは、ひとつのよさは「時間が溶けていく」んですよ。あそこにいると。居心地がいいんですね。なにか親の胎内にいるような(笑)。それで、はまってしまって、人生をあやまるというような……。

二宮：いやあそこはね。「革命の熱き血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君」なんて貼り出してね——これは山中(謙二)先生目当てだったんですが——そういったこともあったのだけれど、なんというか西洋史共同体でね。だから、とってもいいところがあると同時に、それだから困るといったところもある……。それはソシアピリテの問題ですよ。「これはよくてあれはいやだ」というわけではなくて、ひとつのことがよくていやなの、やっぱりね。

橋場：だから、時間が溶けて親の胎内にいるようなのが、よくていやなんですね。

4. 「ムーヴレさんと一緒なら」

橋場：さて、それ以降、助手をなされた後にフランスに行ってからのお話を。

二宮：フランスにでかけたのは1960年。60年安保の年ですね。ちょっと戻りますが、僕にとっては人民広場(1952年)っていうのはものすごい大きい事件だったのですが、60年安保は、戦後史の中では大きな区切りだとは思いますが、僕自身に関して言うと、たい

した意味のないものです。

橋場：そうですか。

二宮：ただ、僕が助手をしていた時期でしたが、西洋史で旗を作って国会のまわりに出撃してね……。写真がありますよ、坂井（栄八郎）君とかね……。そのすぐあとに留学にでかけたのです。ちょうどその夏、ストックホルムで国際歴史学会議がありましてね、普通は留学生はまだ船で行く時代だったんですが、時間がなかったので飛行機で出かけたんです。そういうわけでプロペラ機でローマまで行き、ローマでパンナムに乗り換えた。それが初めてのジェット機でね、ジェット機は急激に上昇するでしょ、そして方向を変える時にもものすごく傾く、もうこのまま落ちちるんじゃないかと……。笑）。その時は高橋（幸八郎）先生と一緒にいったんです。日本が戦後国際歴史学会議に復帰を許されて、初めて本格的に参加した年なんですが、学会そのものがまだ英雄時代でね。とっても面白かったですよ。

ストックホルムの会議を了えて、高橋さんと遅塚君と三人ではるばる汽車でパリに戻ったのですが、僕は日本で閉塞状態だったでしょ。だから、フランスに着いた時には、何ともいえない解放感がありましたね。

橋場：なるほど。

二宮：そして、最初は16世紀の宗教戦争そのものをやろうと思っていたんです。大塚さんと渡辺さんの間で悩んでいた時期の問題にもう一度戻りなおそうと思ひましてね……。

遅塚君は一年前に留学していて、ラブルース先生につくと同時に、ジャン・ムーヴレ先生っていう17世紀のえらい先生についていたんですが、そんな関係で、僕もストックホルムでムーヴレ先生にお会いすることになったのです。「そうか、日本から来たか、何をやりたい、おお高橋の弟子か」ってわけで、高橋の弟子って言うと、もうパスポートなんですね。高橋の弟子ならばね、こいつらには何をやらしても平気だって。これは有難かった。責任重大でもありましたけどね(笑)。

そこでムーヴレ先生に「宗教戦争の社会的側面をやりたい」って言ったら、「おー、おー」って唸っているんですね(笑)。「Ah, Guerre de religion, Seizième siècle, Aspects sociaux! 宗教戦争、16世紀、社会的側面」って唸っているだけなんですね。なんにも言わない。そして「二宮、パリに戻ったらもう一回相談しよう」って。

で、パリに戻ってムーヴレ先生に会いに行きましたらね、「二宮、16世紀というのはムチャクチャにパレオグラフィ（古字体学）が難しい。フランス人でも五年くらい字を読むために時間をかけて、それで初めて何かが始まるっていう世界だ。宗教戦争、しかもそれを社会的側面でやるためには、他人の使っていない新しい史料を探し出さなければならぬから、相当に大変だが……」というわけです。それでもやりたいって言いましたら、「それはよいが、まず17世紀の後半から始めなさい、字体がぜんぜん違う」って言われましてね。それで僕は17世紀から仕事を始めたのです。

でもその頃、僕は17世紀っていうのは大嫌いな時代でね、あれは一種、型の決まっている時代でしょ、古典主義とか、絶対主義とかね。ところが16世紀っていうのは混沌の時代ですよ、まだ型がない、その型のないところに惹かれているのに……。17世紀は嫌だなあって、ルイ14世なんて見るのも嫌だったんですね。今でこそ「抱いて寝る」ってほどじゃありませんけど、ルイ14世にしてもハイヒールを履いていたって嫌だとは思わなくなりましたけどね……。

そういうふうで17世紀から始めましてね。ここでまた僕は、かつて高橋さんの魅力に惹かれたように、今度はムーヴレさんの人柄にもものすごく惹かれちゃったんですね。

「ムーヴレさんと一緒なら、もう一度農村史をやってもいい」と思えるようになったんですよ。それで、パリの南のほうの4つの村をやることになったんです。フルリ・アン・ピエール、つまり、ピエール川沿いの花咲ける村とでもいう名前の村を中心にして、4つの村に跨がっていた所領をやったんですがね。楽しく楽しく、しかしまた辛く辛く過ごした何年かののちに、それを向こうでの論文として書いたんです。

フランス時代、僕はぐずぐずと長居をしたんですが、一つにはこの農村史をやっても良かった。それは日本での講座派以来の構造史の中で考えていた農村史とはまったく違って、人間が具体的に生きている世界だっていうことですね。ですから、農村史に戻ったこと自体は、かつて自分がやったことがこういうところにつながっていきのかつていう気持ちになれましたから、とても嬉しかった。

それと、もう一つは、ムーニエとの関係が大きいです。僕はいまアナル派の仕事をとり上げることが多いのですが、実を言うと、社会史の中でムーニエのグループのやったことをとても重く見ているんです。僕自身の仕事も、それにとても大きな影響を受けている。「フランス絶対王政の統治構造」という論文は、ムーニエの仕事を逆の側から組み替えてみたいということからできたものです。それだけにムーニエの仕事には強い印象を受けているんです。

ですから、ラブルースさんやムーヴレさんの演習と並行してムーニエの演習にも三年程出てまして、例のセギエ文書を使って国制史の研究、アンタンダンとかグーベルヌールとかをやったのです。その頃、ムーニエの演習では、民衆蜂起も扱っていたんです。ムーニエは保守的イデオログですから、当時ソ連のボルシュネフが『フロンド前の民衆蜂起』という本を書いてたいへん評判になり、それをどちらかといえばアナル側が持ち上げたので、ムーニエが大いに対抗心を燃やしてそれを批判するという形で民衆蜂起論をやっていたんですね。そういうなかで僕は、ブルターニュの一揆をやろうと思いついたのです。これはねえ、僕がその後変わっていくのにかなり大きな影響を与えたと思います。その一部を「印紙税一揆」という形で活字にしました。

歴史っていうのは具体的に人間が動く場ではじめて顕現するのだという気持ちね。これは、それを包み込むいろいろな、かつて事物の力と考えていた社会構造とか、国制史

でいえば制度上のいろいろな枠組みがあつて、もちろん人間はそういう枠組みから離れては生きられないのだけれど、がんじがらめになっているだけではないんで、なにか事が起つた時に社会構造も国制も一斉に動き出す、その動き出すところで初めてそれぞれが意味を持つという気持ちがあるものすごく強くなったのは、印紙税一揆をやる過程です。だから僕の場合印紙税一揆をやることで、それまでの農村史研究も、国制史の研究も、合体したといった感じがあります。

いま、ムーニエのことだけ言いましたが、近世史にとってエコール・デ・シャルト(古文書学校)もとっても大事なんですね。シャルトにはしっかりした伝統があつて、制度史をやるのならここに行くのが一番いいかもしれない。僕もムーニエのところと同時に古文書学校にも行っていたのですが、印紙税一揆をやることでいろいろな勉強が一気に合体したって感じがありますね。その辺から出てきたのがロシアピリテ論なんです。橋場：なるほど、そこらいまの二宮先生につながるものが出てきたんですね。

二宮：まあ、僕が高橋さん、ムーヴレさんという本当に傾倒した先生、師として仰ぐ人の事を考えると、いまの僕の仕事は、一体どうつながるんだと思われるかもしれないんですが、僕自身にはちっとも不思議じゃなくて、僕の中では、それは実に微笑ましく共存しているんです(笑)。それぞれが喧嘩をせずに、僕の中にありましてね。

5. 帰国してから逆カルチャーショック

二宮：僕は、1966年に日本に戻ってきたのですが、その時は違和感がありましてねえ(笑)。

橋場：逆カルチャーショックというやつですか。

二宮：いやー、これは相当まいりましたね。やはり日本の社会は変わりましたよ、60年代の高度成長で。僕がフランスに行ってからオリンピックがあり、池田(所得)倍増内閣ですからね。帰ってきた途端にね、オレンジやら黄色やらのひどい色のタクシーが空港に並んでいて、乗ろうと思ったらいきなりドアが開いてポカンとお腹をぶたれちゃってね(笑)。ドアってものは自分で開けるものだと思っていましたから。しかし今やね、ドアが自然に開いてくれなきゃ、この戸はなんだ！なんて思うようになっちゃった(笑)。

橋場：帰国されてから後はいかがです。

二宮：その後は割合分かりきったようなコースでした。帰国してすぐ、幸いにも(笑)病気をしましてね、病室にとじ込められて白い壁と白い天井だけ眺めていました。ひたすらフランスのことだけを想い、自分が日本にいるんだという感じがしなかった。まあ、それですぐにtatamiserしなくてすんだように思います。そういう気持ちのまま68年のバリケードになっちゃった。これは僕にとっては安保闘争よりもはるかに大きかったですね。戦争直後から人民広場までと、68、69年の大学バリケード、これが大きいです。

橋場：遅塚先生も同じことをおっしゃってましたね。

二宮：そうですか。バリケードの中でいろいろあって、その中で僕はソシアビリテ論の方へ行って、印紙税一揆の論文をこのあと書いたわけですが、この論文の中には高橋史学から始まった構造論的な歴史学、ムーヴレさんのところでやった農村史や、アナルの数量的アプローチ、そして、マンドルーとのかかわりが深いソシアビリテ論、この三つがね、あの論文の中には一緒になって入っているんですよ。あの論文を書いていた期間はそう長いものではなかったんですが、いま読み返してみるとあの短いあいだに僕の中にああいうことが次々と起ったんだなあと思わざるをえません。そういう意味で僕にとっては転機となった論文です。しかも矛盾に満ちているからね(笑)、僕の書いたものの中では自分にとってわりに大事なんです。あの論文のおしまいの方でたどり着いたところが、その後の僕の歴史の見方の出発点じゃないかとすら思います。バリケードの残映が残っていましたから、ちょっと跳ね上がった言い方をしているんですが、しかし、その中でやはり系の歴史学だけではつかまえきれないんだという感じで、ソシアビリテ論、読解の歴史学へ入っていく、その契機にあの論文はなりましたね。

同じ頃アナルの第三世代が出てきたわけですが、彼らも68年の転機を経ているのであって、たまたま彼らと同時代体験をしたと思います。その頃から日本の歴史学も（アナルと）同時代を生きていくようになったと思いますよ。一見輸入しているように見えますが、僕はそうじゃないと思う。いまや同時代に生きて同時代的に問題を考えようとしているわけです。これほどの情報社会ですから相手の言っていることを無視して、自分の主張だけを言えないわけですから、相手の言うことを援用したりするわけですが、それはかつてのように半世紀遅れで相手の理論を導入して真似しているものでは全然ない。だから、最近の日本の歴史学の動きは、なにかに影響されているのではなくて、それぞれが自分の場をきちんと考えようとしたら、同じような問題にぶち当たったのだと考えるべきです。

そういう意味で社会史が出てきたわけですが、それはアナル第三世代の歴史人類学と重なりあっている。ところで、アナルの歴史学への批判のもっとも重要な点は、権力論が抜け落ちているということだったんですが、僕の場合は、印紙税一揆をやってそこからソシアビリテ論に向かったものですから、権力の問題を抜きにした社会史というのは考えられなかったですね。そこでもう一度ムーニエやグーベールさんの国制史が僕の中で浮び上がってきましてね。その辺を考えているところへ、（東北大学でやる）西洋史学会のシンポジウムで報告しないかっていう話が吉岡さん、成瀬さんからありましてね。「フランス絶対王政の統治構造」はその時の報告です。僕はだいたい長期的な計画を立てて仕事をやっていくタイプじゃなくて、なんかやむを得ず仕事をしていつてるわけですが(笑)、そのやむを得ずやった仕事はね、今から見るとあれが権力の仕組とソシアビリテ論の両方を重ねあわせてつかまえたいなあという気持ちが働いて、そこから生まれたものだと思います。

あの論文の背景は実は高橋史学なんです。高橋さんの『市民革命の構造』の序論に、上向過程と下向過程という名高い方法的考察があるんですが、僕の権力構造論というのはまさにそれなんです。統治構造の論文にはムーニエ的なものもソシアビリテ論も入っているんですが、基本は高橋史学の発想なんです。そういうわけで僕は、印紙税一揆を出発点としてそれを権力の問題と重ねあわせるという形で統治構造論をやって、その後エトノスなんてところに迷い込んだりしているわけです。歴史理論というか歴史認識のレベルでの仕事はそれと重なっているんですが、76年にル＝ゴフが来ましてね、ル＝ゴフは僕がフランスにいる時代から親しかった人物なんです、彼がやってきて、日仏(会館)で講演会やるっていうんですね。ところが原稿もない、そしてテーマは歴史とエトノロジーっていうんですね。僕はろくなことを知らないんで、困っちゃったんですが、それが『思想』に載ったル＝ゴフの、例の「歴史と民族学の現在」という講演なんです。

その後、樺山(紘一)君や福井(憲彦)君と一緒に『アナル論文選』なんていうかたちで、少し紹介してみようかと。それはどういうことかといいますと、ル＝ゴフの講演が出てから理屈の上ではフランスの新しい傾向が少しは知られるようになったんだけど、具体的な仕事はあまり知られてないなあという気持ちもあって、アナルには面白い論文が載るんだから、訳してみようかっていうことになったんですね。ところが、実は、面白い論文とはいうものの七面倒くさい論文が多くてね(笑)。苦心惨憺してまことにロスの多い企てでした、あれは(笑)。まあフランスの歴史家のいい面と困る面とあって、そんな文章に凝らなくてもいいような気もしますが、相変わらずいまでも七面倒くさい文章が多いですけどね。

6. 「この世に足をついている限り」

二宮：そんなことがあって、その後の大きな動きは、それこそイッガーズが整理してみせてるようなことですから、取り立てて言うこともありません。ソシアビリテ論を軸とした仕事としては、岩波の『世界史への問い』のシリーズなどもそういう発想で歴史を考え直してみたいという気持ちをこめたつもりではあります、全体の仕組みの中に。第4巻の『社会的結合』や第5巻の『規範と統合』は、直接にソシアビリテ論にかかわる部分です。ただ、そういう中で、僕自身あのシリーズで「王権の象徴機能」というテーマで書いているんで、それがどういうことかっていう問題がもう一つあるかもしれない。

ソシアビリテ論をやっていく過程では、当然のこととして日常性のレベルを重視していたのですが、特に僕の場合は意識化されたものよりは意識されないつながりというものを重くみる、結合関係でも形のできてしまったものではなくて、形をとらない結びつきの方が大事なんだ、ということを強調してきた。人と人との意識下のつながり、心の傾き — 僕はそれをマンタリテという言葉で言い表しているわけですが — が非常に

大きい意味を持つんだっていう風の問題を立ててきたんですね。ところが、心の傾きっていうのは、日常の中から出てくる自生的な心の在り様とも言えるんですが、逆にそこには、「この世に足をつけている限り」という問題もありましてね、マンタリテの形成の過程は組織化の場でもあるんです。で、組織化される場というのは、どういう形で組織化されるんだろう、ということを考えていく中で、シンボルの問題とか表象の問題が大きく浮上してきた。僕は「フランス絶対王政の統治構造」の中では、「侮蔑の滝」っていうような言い方で……。

橋場：ああ、カスカードですか。

二宮：ええ、あれは一つの心性の型ですね、「侮蔑の滝」っていう心性の型ができてしまうから、みんなタテの関係へ閉じこめられてしまう。で、それをヨコの関係に切り直すためには、滝の流れを変えなきゃいけないわけですね。僕のシェーマで言いますと、左側の水平的な関係がどうして右側の垂直的な関係の虜になってしまうのか、そこがあそこでは言われていないじゃないか、という問題です。そんなわけで僕としては、物理的な力関係のところではなしに、心性レベルのところ、シンボルが果たす役割を、王権の象徴機能という形で解いてみたいと思ったわけです。ですから、あの「王権の象徴機能」の論文は「統治構造」の問題観の延長上にあるんですが、まだ中途半端で、出してしまってから、自分でも不満のところがあるんですが……やはり論文は、もう少しストラテジーをよく考えて書かないといけませんね(微笑)。

橋場：でも、難しいですね。

二宮：後からあれ読みなおしてみますとね、シンボルを発信する側のことはまあまあ書けているんですが、受け止める側が追及できていない。シンボルをどう受け止めたかっていうのは別の問題だってことが当然あるわけで、それをもっと本格的にやらなきゃいけないのに、チョコっと触れただけでおしまいにしてんのね。今、僕はシャルチエを問題にしてあの面倒くさい文章に苦労しているんですが、それもその問題なんです。シャルチエに言わせると、テキストはテキストとしての構造を持つてる。しかし、そのテキストは読まれてはじめて意味を持つのであって、読むというプラティークを経た時に、それは著者の意図とも違えば、テキストそのものの構造とも違う、全く別のものがそこに生まれうるんだって言うんですね。その「テキストの世界」と「読解の世界」のズレを解いていくのが歴史家の仕事だって、彼は言っているわけでね。それはもうその通りなんですが、非常に難しい作業で、彼自身もそれを十分にやれてるわけじゃないんですが、しかし王権の象徴機能ってところまで行き着いてみて思うのは、やはり、読むという行為の意味作用ですね。そこを解いていく仕事をやらないと、あの問題は決着がつかないなあと思っているんです。

その他、エトノス論なんていうのも少々やりましたが、これはロシアピリテ論をちょっとずらしただけですので(笑)……。écrit de circonstance ってフランス語があるん

ですけどね。シルコンスタンスって「状況」でしょ。「状況の中で書かれたもの」って、これはよく悪口として言われるんだけど、僕を書いてきたものって割にそうなんです。ね。「もうしょうがねえ、なんか書かなきゃなんないか〜」なんて思って捻り出すように書いてね。論文としてはストラテジーはまとまりもないしバランスもとれてないってことになるわけですが、そういう風にして書いてみると自分でも問題を発見するってところもありましてね、そういうのをきっかけにして次の仕事の方に進んで行ったってこともあるわけです。ですけどね、バランスのとれた形で問題を十全に出し切ったものはあんまり書けないんで……。

まあしかしどうでしょう。こういうやり方に先がありますかねえ(笑)。

7. 「細部の中に全体を見る」

橋場：そこをお聞きしたいですねえ(笑)。二宮先生は今のお話しからわかるように大変視野の広い、特に〇〇世紀のフランス史とか政治史とかいう、細かい問題関心というよりは、もっとそれ以前に、個人と社会といった大きな取り組み方をなさっているわけですが、しかし現実には我々は、たとえば私は古代ギリシア史といってもやはりアテネの、それも古典期で、しかもその中の民主政の、そのまた弾劾裁判という、要するに非常に細分化されたところから出発して、好むと好まざるとにかかわらず、この道のプロとしてやっていくためには、そうせざるを得ない状況に追い込まれているわけです。二宮先生はそういった状況をどう捉えておられるんでしょうか。これはしょうがない、細かく精緻に歴史を見るというのはある意味で進歩なんだって言う方もいらっしゃるんですが、それとは逆の、もっと全体的な視点で見る捉え方(の必要)というものは……。

二宮：僕自身の具体的な仕事だって、今橋場さんの言われたとおりで、あるいはもっと狭いかもしれない(笑)。ただ、全体史ではなく全体を見る目ということを僕が言ったのはなぜかと言うと、全体史というのは何かいろんなものが揃っていなくちゃいけないというイメージを与えますよね。しかも、これとこれが三つ揃っていれば、あるいは五つとか七つとかあれば、それで全体ができあがるんだって、かつての構造論はみんなそれでやってきたわけですね。

ですけど、全体を見る目というのそういう意味合いではないので、やはり歴史家というのはミクロ・ストーリーじゃありませんけど、細部に全体を見るっていうことが大事なんだろうと思いますよ。

橋場：細部に全体を見る……。

二宮：ええ。対象を広げて足し算をしていけば全体になるってわけじゃ全然ない。また、自分がある一つのことをやっても、他の人が別の一つのことをやっていて、みんな合わさればいつか全体になるんだっていう、そういう話でもないんです。かつてよく言

われた、細部をやっていることを正当化するための一つの論法は、一人一人の個別的な営みが全体として大きな歴史を生み出すんだという……。

橋場：分業論ですね。

二宮：そうそう。それは僕は採らないですね。そういう面は確かにあって、それぞれの仕事が終わって学問が全体として発展してもいくわけですけど、一人一人の仕事としては、そういう風に思わない方がいい。やっぱり、一つの問題の中に全体を見る。そういうつもりで見ていくということですね。

そういう風に言うと、とかく誤解されるのは、たとえば「その一つの問題が全てを統御するファクターだと思っているのか」というような批判ですね。たとえば、経済的な事象の中に全体を見るっていう言い方をすると、経済が基礎過程で歴史の総体を規定すると考えているかに聞こえるかもしれないんですが、そうじゃないんです。経済を解く時にそこに全体を見るということなんでね。

ミクロ・ストーリーの発想に近いんですが、歴史家は細部を相手にしてそこに歴史がちゃんと見えてくるようにならなければいけない。

橋場：全体が見えてくるようにならなきゃいけない。

二宮：ええ、そうですね。そういうことじゃないかな。まあ、歴史学っていうのは、かつては人間の営みの長い発展の過程を貫く法則性を説く学問と考えて、歴史家が過去の法則性を解いてくれば、現在も解けるし、未来への指針にもなるっていう風に考えてきました。そういう歴史の見方だって全く解体したものと僕は思いませんけど、逆にもう一つの歴史学の大きな役割は、現代を相対化することでしょう。現代っていうのはますます非歴史的な、時間軸を消したような世界になってきていますから、現代を相対化するという営みがものすごく大事になってくる。歴史人類学なんてことが言われるようになったのは、そういう役割を歴史学に託したいという希いの現れでもありますね。

橋場：わかりました。では歴史学が今の社会に存在する必要性というか（有用性ということではなく）、何のために歴史学があるのかという根源的な問いですけど、それについて何かお考えになっていることはありませんか。

二宮：橋場さんはマルク・ブロックに出てくる少年の様なことを言うから困る（大笑）。、「歴史は何のためにあるのか」（笑）。僕は先ほど言った二つが歴史の役割であろうと、大きく言えば考えているんです。法則性とは言いませんが、人間が生きてきた長い経験の積み重ねってものがあるわけで、そういうものを時間という軸の中で捉え直していくことで現代をよりよく理解しようとする。これは昔から言われてきた歴史の役割だと思いますがね、それがあまりに発展法則的に理解されすぎて、あたかも社会学に役立つかのように誤解されたところがあるために、そういう歴史観が破産したということが言われたりするわけですが、それはやはりある一つの極端な形のもので破産しただけのことであって、やはり人間の長い時間の中での経験の積み重ねというものを顧みると

いう、そういう精神の営みは依然として重要性を持つと思います。

それからもう一つは、そういう連続性として捉えるだけではなくて、人間は異文化と向かい合って自分たちを相対化しながら自己認識をしていくわけですが、空間的な異文化との対面だけでなしに、時間的な異文化との対面という面が非常に大きな意味を持つわけで、後者の方が、たとえば現代文明を批判的に捉え直すという時には、非常に戦闘的な意味を持つわけです。ですから、かつてはそれを文化類型という形で — 文化人類学の場合はそうですけど — 違う文化の型を対置することによって — たとえば日本 v s. 西欧とか — そういう形でぶつけることで自分の鏡としたところがありますけど、それを逆に時間の中での異文化というかたちでやることで、もう一つ違った意味が出てくるように思いますね。歴史人類学というのは、そうした発想に立つのですが……。ですから、歴史学っていうのは、その両方の意味を担わなければいけないんじゃないでしょうかね。

橋場：最後に、大学院生などを含めて若い学生にメッセージがありましたら、何か。

二宮：まあ、一緒にやりましょうって、ことですね(笑)。

橋場：もうちょっと何か。

二宮：僕はさっき独特な戦後を生きたといった類いの話をしましたけどね、僕は世代論っていうのは嫌いでした。生きてきたその時々、周りの人間とが同じ世代に属しているっていうふうには思ったことがないです。同じ年頃だから同じように感じているとか、考えているとかいう風には全く思わないんですね。そういう意味では、若い人たちは世代が違う、それだから発想が違っちゃって話しが通じないとか、そういう風な気持ちはないですね。そうじゃなくて、テレパシーのように通じる人と通じない人がいるんで、そういう様なことが年齢を越えてあると。基本としてはそういうことです。

しかし、かつてよりは世代というものがあるかもしれないと、思うようにはなりませんでした。距離をもって見ることでね。自分がその中にいるときは、世代という風に自分を意識することは非常にいやでしたけどね。突き放して、自分が幼かった頃とか若かった頃とか、考えて見ると、やはり時代の特徴っていうのがあって、そういう中での一人一人だったかなあ、という気持ちも持ちますからね。

そんなものは越えて通じあえるんだなんてことを言ったって、「馬鹿言いなさんな」って(笑)、弾かれるのが当然というような面もあるわけでね。ですから、一緒に考えましょう、っていうこと以外にないような気がしますよ。

橋場：そうですか。特に「今の若いモンは……」みたいな考えは……。

二宮：ハハハハ。それ言ったら、おしまいのような気がしますよ(笑)。

橋場：どうも長い間ありがとうございました。

(にのみや ひろゆき・東京外国語大学教授・フランス近世史)